

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成19年度病虫害発生予報第2号(5月)について

このことについて、病虫害発生予報第2号を発表したので送付します。

予報第2号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
水稲 (普通期)	ツマグロヨコバイ	並	並	並
	萎縮病	-	並	並
	ヒメトビウンカ	並	並	並
	縞葉枯病	-	やや多	並
かんきつ	そうか病	やや多	やや多	やや多
	ミカンハダニ	並	並	並
なし	黒星病	多	多	並
ぶどう	黒とう病	やや少	やや少	並
かき	炭そ病	-	やや多	やや多
	フジコナカイガラムシ	並	並	並
果樹共通	カメモシ類	やや少	やや少	並
茶	カンザワハダニ	やや多	並	多
	チャノミドリヒメヨコバイ	多	多	多
	チャノキイロアザミウマ	多	多	並

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

平年と同様に晴れる日が多い見込みです。

気温は平年並か高いでしょう。降水量は平年より少なく、日照時間は平年より多いでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並、2～4週目は平年並か高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	40	40
降水量	40	30	30
日照時間	30	30	40

(福岡管区气象台 平成19年4月27日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作 - 普通期水稻】

1 ツマグロヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

4月5半旬の片振り20回すくい取り調査の結果は次のとおりである（±）。

ツマグロヨコバイの越冬量 畦畔 1.0頭（平年 0.4頭、前年 0.2頭）

休閑田 0.8頭（平年 1.9頭、前年 0.9頭）

小麦田 0.5頭（平年 1.0頭、前年 0.1頭）

(3) 防除上の注意

ツマグロヨコバイを対象とした防除の必要はない。

2 萎縮病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

4月5半旬調査のツマグロヨコバイ越冬量は平年並（±）。

(3) 防除上の注意

媒介虫であるツマグロヨコバイを対象とした防除の必要はない。

3 ヒメトビウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

4月5半旬の片振り20回すくい取り調査の結果は次のとおりである（±）。

ヒメトビウンカの越冬量 畦畔 0.4頭（平年 0.1頭、前年 0.2頭）

休閑田 0.8頭（平年 0.5頭、前年 1.0頭）

小麦田 0.4頭（平年 1.8頭、前年 0.7頭）

(3) 防除上の注意

本虫は、縞葉枯病の媒介虫である。防除に当たっては、縞葉枯病の項を参照のこと。

4 縞葉枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア ヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、4.2%（平年 2.4%、前年 5.3%）であった。（地域別ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、4月26日付技術情報参照）（+）

イ 4月5半旬調査の結果、ヒメトビウンカ越冬量は平年、前年並であった（±）。

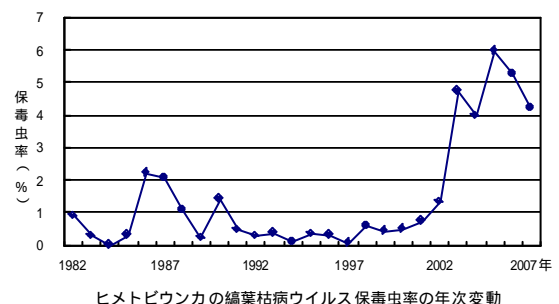
(3) 防除上の注意

ア 縞葉枯病の常発地や保毒虫率が高い地域では、感染防止対策として効果の高い育苗箱施用薬剤を選定する。

イ 平成17年度に実施したヒメトビウンカの薬剤感受性検定結果によると、フィプロニルは殺虫効果の発現に時間を要することから縞葉枯病に対する感染防止効果は低いと考えられる。

ウ 育苗箱施用薬剤の使用基準（投下薬量）を遵守する。

エ 育苗箱に農薬を散布するときは、育苗箱からこぼれないように行い、ビニルシート等を敷



き地面への薬剤の浸透防止に努める。
 オ 縞葉枯病の発病株を認めたら抜き取る。

【果樹】

1 かんきつそうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査結果(±)

発病葉率 0.5% (平年 0.3%、前年 0.5%)

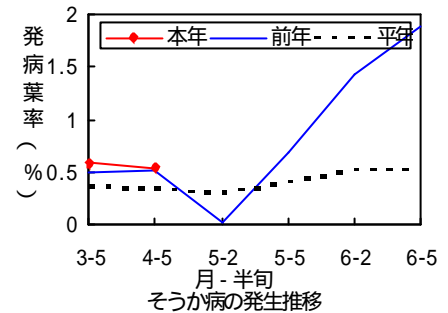
発生ほ場率 47.1% (平年19.8%、前年 29.4%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない(-)。

(3) 防除上の注意

ア 落花直後に灰色かび病、黒点病との同時防除を実施する。

イ 罹病葉は伝染源になるので除去する。



2 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

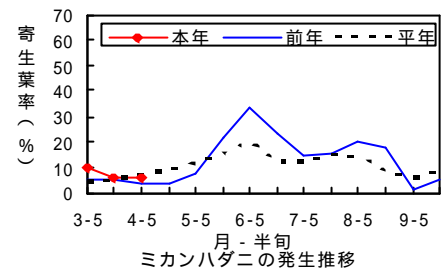
(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査結果(±)

寄生葉率 6.2% (平年 7.0%、前年 3.9%)

発生ほ場率 52.9% (平年 42.0%、前年 64.7%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない(+)



3 なし黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査結果(±)

発病葉率 0.4% (平年 0.1%、前年 0.1%)

発生ほ場率 40.0% (平年 9.2%、前年 13.3%)

イ 主要感染時期である開花期間に曇りや雨の日が多く感染に好適であった(+)

ウ 4月中下旬の降雨により感染が拡大している可能性がある(+)

エ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない(-)

(3) 防除上の注意

ア 発病葉や発病果実は発生源となるので、見つけ次第取り除き焼却または埋没する。

イ 今後降雨があると発生が増加する恐れがあるので、防除を徹底する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を控える。なお、効果が劣る場合は他の系統の薬剤を使用する。

4 ぶどう黒とう病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査結果(±)

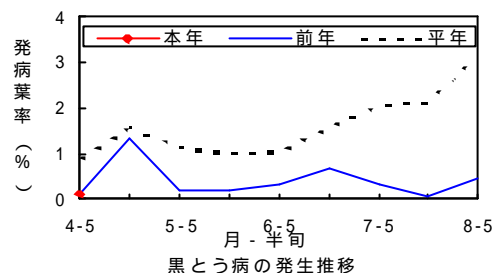
発病葉率 0.1% (平年 0.9%、前年 0.1%)

発生ほ場率 7.7% (平年 15.8%、前年 7.1%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない(-)。

(3) 防除上の注意

罹病葉、罹病新梢は発生源になるので、できる限り取り除き処分する。



5 かき炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

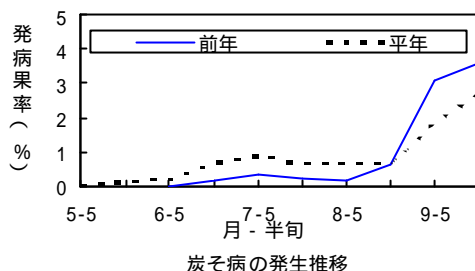
ア 前年は、10月2半旬に発病果率3.6% (平年 2.7%)、発生ほ場率87.5% (平年66.1%)と急増した(+).

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない(-)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病枝は発生源になるので、取り除き処分する。

イ 罹病枝の多い園では、4~5月に雨が多いと感染が拡大するので薬剤散布を徹底する。



6 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査結果(±)

寄生枝率 2.6% (平年 2.9%、前年 1.5%)

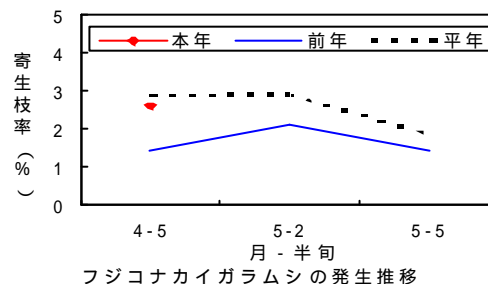
発生ほ場率 56.3% (平年 49.5%、前年 35.3%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない(+).

(3) 防除上の注意

ア 現在、幹の粗皮間隙から新梢へ移動した越冬幼虫が成虫へ発育中であり、防除を行っていないほ場では開花前に必ず防除を行う。

イ 開花前の防除はミツバチに影響の少ない薬剤を散布する。



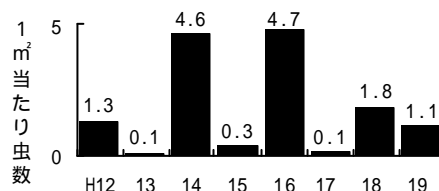
7 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 1㎡当たりの越冬量は、平均1.1頭(平年 1.4頭、前年 1.8頭)であった(±)。



チャバネアオカメムシの年次別越冬量

イ 4月5半旬までの予察灯の誘殺虫数は次のとおりである(±)。

(調査地点：県内6か所の平均)

チャバネアオカメムシ 2.3頭(前年 0.2頭)

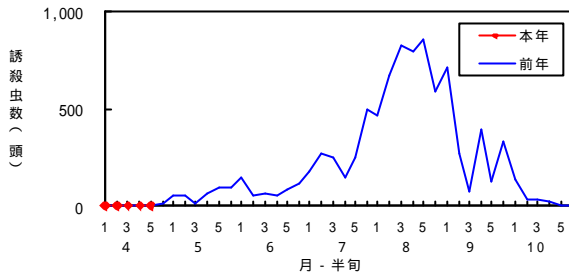
ツヤアオカメムシ 1.0頭(前年 0頭)

ウ 4月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は次のとおりである(±)。

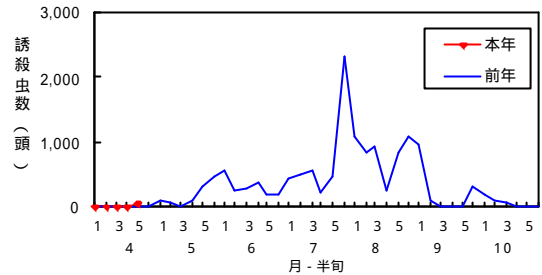
(調査地点：筑紫野市吉木)

チャバネアオカメムシ 34頭(前年 1頭)

ツヤアオカメムシ 0頭(前年 0頭)



予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移 (県内6か所平均)



集合フェロモンにおけるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移 (筑紫野市)

エ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は少ない(+)

(3) 防除上の注意

気温が上昇すると活動が活発となり、ビワ、モモ、ウメ、スモモ等では果樹園への飛来があると予想されるので園内の発生状況の把握に努め、発生に応じて防除を行う。

【果樹・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ アブラムシ類	並	並	やや多	・ミカンハモグリガやハマキ類との同時防除を行う。 ・発生初期に防除する。
なし アブラムシ類	少	やや少	やや少	・発生初期に防除する。
かき うどんこ病	-	並	並	・炭そ病等との同時防除では、葉の裏側にも薬剤がよくかかるように散布する。

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査結果(+)

寄生葉率 4.1%(平年 3.6%、前年 1.3%)

50葉当たり虫数8.0頭(平年 9.8頭、前年 2.3頭)

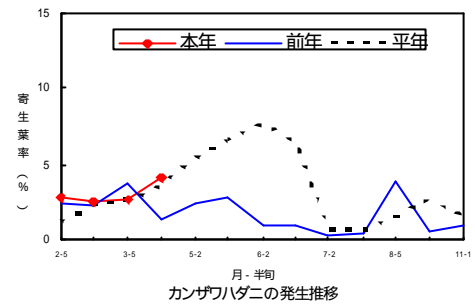
発生ほ場率 60.0%(前年 38.5%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は少ない(+)

(3) 防除上の注意

ア 一番茶の摘採時期をむかえている茶園は、摘採後に防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査結果(+)

たたき落とし虫数0.18頭(平年 0.04頭、前年 0.01頭)

発生ほ場率 36.0%(前年 3.8%)

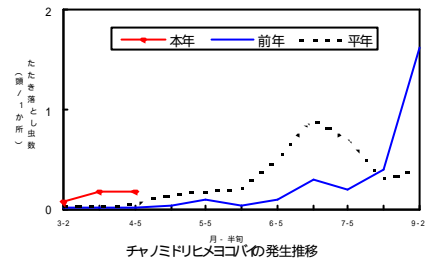
イ 3月5半旬調査で越冬成虫の発生が平年より多い(+)

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は少ない(+)

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 一番茶摘採後の防除と二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



3 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年より多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査結果(+)

たたき落とし虫数1.94頭(平年 0.30頭、前年 0.18頭)

発生ほ場率 96.0%(前年 50.0%)

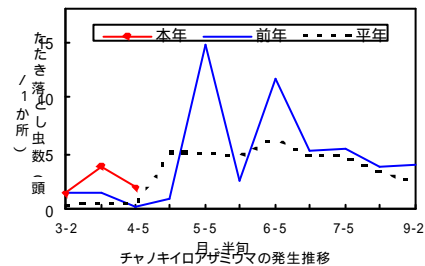
イ 3月5半旬調査で越冬成虫の発生が平年より多い(+)

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は少ない(+)

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 一番茶摘採後の防除と二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
ネギ シイタケヨトウ	並	並	並	
アスパラガス 斑点病	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月5半旬調査結果は、寄生株率20.0% (平年25.9%、前年25.0%)であった。 ・ 早期発見に努め、発生初期から防除する。 ・ ほ場内や周辺の除草を徹底する。
アザミウマ類	並	並	並	
アブラムシ類	やや少	やや少	並	
ハダニ類	並	並	並	
鱗翅目	並	並	並	

農薬の適正使用、飛散防止の徹底を！

全ての農薬の残留基準が作物毎に設定され基準値を超えた食品（農産物）の販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう、これまで以上に注意を払う必要があります。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数を使用基準を遵守する。

動力噴霧器、薬液タンクなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 生産履歴の記帳

農薬使用の際は、作物、ほ場、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpnpn.ne.jp